

学校物語 (国吉小の巻17)

～吉野先生のお墓～

余 木 令 一

大多喜町中の光善寺に吉野一松先生のお墓がある。と聞いていた。今年の三月十日、俗に暑さ寒さも彼岸までというその彼岸にはなお一日早かつたが、それはうららかな春光のむごむごであった。私は一束の生花をたずさえて、その墓前にぬかついた。

さだめし立派なお墓であろうと想像していたが、案に相違して小さいものであった。いや、余りにもみすばらしいと表現したほうが適切かも知れないと思われるほどの墓石でしかなかった。

世の子弟教育のため清貧に甘んじて偉大な感化を及ぼした先生。愛国者であり、音楽、漢学、詩文なんでもござれと学問して少しも倦(う)むことをしらなかった先生。あの道、この道の因縁で、明治、大正、昭和三代にわたる大先覚者の徳富蘇峰に知遇され、というよりはむしろ蘇峰さえ一目(いちもく)おいたというその吉野先生。生前の人徳と功勞をしのんで顕彰するような墓標が建たないものか。私は哀慕の情に堪えず、しばらく墓前を低徊(ていがい)してもの思いに沈み、そこを立ち去るにしのびなかつた。

しかし帰る途すがら考えを一変した。あれでいいのではなからうかと。生徒の楽隊用具を、おの

の財布をはたいてまでして、ととのえてやつた先生。寄る年波も考えず幼稚園児の福祉のために私財をなげうって、和氣アイアイの雰(ふん)囲気に浸(ひた)っては満面に笑(え)みを浮かべていた先生。

名譽欲も金錢欲もなにも一つなく教育ひとすちに生涯をささげ、國家の降参をおもんばかっていた先生のことだから、墓など小さく、しかも墓地の庁隅で十分。いや、そうでなければならぬと考えておられたにちがいない。人並み以上のものを構(かま)えられても先生は決してよろこびはしないであらう。一般的にいえば墓ばかりが光りかがやいたとて、それに何の意味付けがあらうというのだ。あれでいいのだ。私は自分自身に言いきかせるように、ふたたび強くそうつぶやいたのだ。

よしんば、うつくしい大理石の墓碑が建てられなくとも、したがってまた赫々たる偉勲を稱賛する碑文がきざまれなくとも、国吉小学校が連綿として存続するかぎり国吉に残された徳功は永く人々の胸をうち、大いなる感化を及ぼしつづけるであらう。既に黄泉の客となつてゐる先生に、私はなにか筆舌につくし得ない教えをうけたような気にもなつた。故人のご冥福を心の底から祈つて吉野先生の項を終りた

合 掌

吉野先生の
墓傍に立つ
筆者